

大学生1,000人にきく 学びに関する意識調査



経営学部の石崎徹ゼミナール生6人が参加したプロジェクト、大学生1000人に聞く『学び』に関する意識調査(FUTURE 2002)の結果がこのほどまとまった。その主なものを紹介し、さまざまな角度から『学び』への大学生の意識を探ってみよう。

満足度も面白いも低い

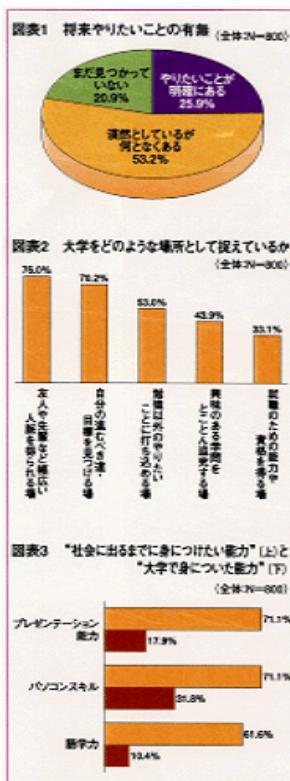
大学の授業に対する満足度と面白さは、ともに評価が低く「満足していない」が60.9%

「つまらない」と答えた人も57.4%だった。

将来、やりたいことの有無は、「明確に決まっている」が25.9%で4人に1人だった(図表1)。むしろ大学を「自分の進むべき道を見つける場である」ととらえているのが70.2%にのぼった。(図表2)

身につけたい能力は

社会に出る前に身につけたい能力は「プレゼンテーション能力」(71.1%)、「パソコンスキル」(71.1%)、「語学力」(61.6%)が上位を占めたが、それらが実際、大学で身についたと答えた人は少ない(図表3)。授業に対する取り組みは、週のうち「2~4割さぼる」が31.7%「5割以上さぼる」が28.1%。また授業中の「居眠り」「メール」「おしゃべり」についてはそれぞれ8割前後が「してしまう」と答えた。



目標決まれば主体性も

小・中・高の教育は83.2%が「役に立っている」と答えている。また「過去の受験勉強に意義があった」が69.8%。自己成長につながったとする意見が多かった。

「将来やりたいことが明確にある人」と「見つからない人」を比較してみよう。

「大学の授業以外で自主的に勉強している人」は「明確にある人」が62.3%「見つからない人」が36.1%だった。

「明確にある人」で、大学で面白いと感じる授業が「実践的なスキルが身につく授業」と答えた人は52.2%であるのに対し、「見つからない人」は43.0%だった。将来への目標、目的が明確になれば「学び」に対して主体性をもって取り組もうという一面がうかがえた。

一何をすべきか「双方」で考えよう

同プロジェクトではこれらの結果を分析。大学の授業に対する学生の評価は総じて低く、大学の「学び」に、意義を見出せない学生たちの姿が浮かび上がった。とはいえ、問題は大学側だけにあるのではなく、学生側に主体的に「学ぶ」という意識が低い。大学生は、義務教育的な受け身の姿勢を脱し、「学ぶ自由」の意味を考え直し、「自分自身の答えを創り出す」という発想が必要では—と提言している。

石崎助教授は「調査結果から『やっぱり学生は勉強しない』『大学の授業はつまらない』と感じるのではなく、大学、学生の双方で本当に『学び』の楽しさを実感出来るようにするには、何をすべきかもう一度考えるべきではないだろうか」と話している。

同プロジェクトは東京広告協会の協賛と協力のもと、本学のほか上智、成蹊、東京経済、東洋、早稲田の各大学で広告、マーケティングを学ぶ学生が昨年、8カ月間にわ

たって企画、調査実施、分析を行った。

石崎ゼミからの参加は4回目で、今回は松永泰明くん、野田三紀子さん、松井孝文くん、山口和伸くん、篠田英輔くん、青木奈緒さん(全員現在・4年次生)が参加した。

野田さんは「調査に参加することで今、何が自分に足りないかを知ることが出来、社会に出るまで身につけたい能力が見つかった気がします」。青木さんは「自分を見つめ直すことが出来ました」と、有意義だった8カ月間を振り返った。

〔4月15日/ニュース専修8面〕